

温排水対策事業リモートセンシング調査 — 抄録 —

涌 坪 敏 明・鈴 木 史 紀・伊 藤 欣 吾

発 表 誌 名

平成3年度 電源立地地域温排水対策事業調査報告書（大間地点）・平成4年3月・青森県

抄 録

温排水の排出が予測される全面海域の水産資源の維持培養及び高度利用を図るため、その基礎となる水温分布を気象衛星NOAAの情報から入手することにより、沿岸漁業への利用手法を開発し、沿岸漁業の操業の効率化を図ろうとするものである。

1. 水温分布情報

平成3年2月から平成4年1月にかけて気象衛星NOAAより入手した鮮明な衛星画像データを58件（44日分）保存した。本システムが本格的に移動した平成元年度以降では最も多いものであった。良好な衛星画像からは水塊配置やその短期変動についての詳細な情報が得られた。

今年度はより迅速なデータの解析を目的として、電話回線を利用したパソコン通信を実施した。

また、昨年度の考察で指摘したランドサット衛星等のより精度の高い画像情報の入手を図るため、NASDA（宇宙開発事業団）の保存データの検索を行い、少ないデータであったが、奥戸から佐井にかけてのごく沿岸部にある濁りの状況が詳細に分かる画像を得ることができた。

2. 標 本 船 調 査

ア、スルメイカー一本約（隻数：5隻 調査期間：平成3年6～11月）

調査期間中の延操業日数は446日で、漁獲は56,186箱（1箱は約5kg）であった。操業日数では7・8月が、漁獲箱数でも8月が多かった。利用頻度の高い漁場は、8月以降の太平洋沿岸で、次いで大間埼周辺（前沖）の漁場となっており、例年と同様の傾向を示していた。

イ、一本約（隻数：5隻 調査期間：平成3年6～11月）

調査期間中の延操業日数は252日で、ヒラメの漁獲は878尾、漁獲水深は15～110m（主に20～40m）であった。このうち前沖での操業日数は190日で、全体に占める割合は75%であった。昨年に比べて前沖での操業が増えている。

3. 魚体測定調査（スルメイカ）

イカ釣標本漁船の操業海域でのスルメイカの魚群の性状を把握するため、調査期間中に延19回、2,086尾の魚体測定を行った。サンプリングは八戸・白糠・大畑港で行った。

外套長組成の推移は、八戸のものが他の地区に比べ、全期間を通じて外套長組成の範囲が広く、かつ、モードが多峰型であるという特徴がみられた。

4. 考 察

奥戸漁協所属のイカ釣漁船の漁業者にとって衛星画像は、①出漁準備直前の水温情報、②好漁場の判断材料として主に利用されている。標本船の漁業者でも、漁切れ時に画像情報から潮境の移動状況を判断して漁獲成績を高めた人もおり、衛星画像の情報は高く評価されている。

今後とも継続的に衛星画像の蓄積を図り、漁業者のニーズに対応する体制を維持していくことが、漁業へ応用する上で重要と考えられる。

ランドサット衛星等の画像情報は、NOAA衛星に比べデータは少ないものの、微細な沿岸情報があることから、今後とも情報の収集を図る必要があろう。